

## レクシヨナリー写本の聖者暦

益田 朋幸

レクシヨナリー Lectionary とは、典礼で朗読される新約聖書の章句を、教会暦に従って編纂した書物である。使徒書簡を編集した使徒書簡レクシヨナリー Praxapostolos も存在するが、圧倒的多数は福音書の章句を編集した福音書レクシヨナリー Gospel Lectionary で、本稿でレクシヨナリーと呼ぶのもこれである。典礼用福音書抄本、日課書等と訳される場合もあるが、定訳はないので、レクシヨナリーの語を用いる。K・アラントの新約聖書写本リスト<sup>1</sup>によれば、断片・近代含めて約 2400 冊のレクシヨナリーが現存する。四福音書 Tetraevangelion の現存数は 1300 ほどであるから、ビザンティン写本中最大のジャンルと言える<sup>2</sup>。

レクシヨナリー写本挿絵の体系的な研究はいまだなされておらず、そのためにまず我々は素材となる各写本を記述・出版しなければならない。福音書記者像以外のナラティヴな挿絵を有する、中期ビザンティン時代（9～13 世紀）のレクシヨナリーは以下の通りである。今「中期」と記したが、説話的な挿絵をもつ初期のレクシヨナリー、後期のレクシヨナリーは現存しないので、レクシヨナリーに説話場面を付すという習慣は中期のみのものであったと考えられる。

- ・パトモス島聖ヨハネ修道院 Cod.70（10 世紀）
- ・サンクト・ペテルブルグ、国立図書館 Cod.gr.21（10 世紀）
- ・アトス山ラヴラ修道院 Cod.A 86（10 世紀）
- ・アトス山ラヴラ修道院 Skevophylakion 蔵写本（11 世紀）
- ・アトス山イヴィロン修道院 Cod.1（11 世紀）

<sup>1</sup> K. Aland, *Kurzgefasste Liste der griechischen Handschriften des Neuen Testaments*, Berlin/ New York, 1994<sup>2</sup>.

<sup>2</sup> 筆者によるレクシヨナリー関係の論文は以下の通り。レクシヨナリーの構成や研究史については、1996 年 5 月論文、2005 年大学院紀要論文を参照。本稿で概観する聖者暦の具体的な検討については、2005 年研究所紀要論文を参照。他は挿絵の図像学的分析及び個別の写本研究である。Εικονογράφηση του χειρογράφου αριθ. 587 της μονής Διονυσίου στο Άγιο Όρος Συμβολή στη μελέτη των βυζαντινών ευαγγελιστοαρίων, diss., Thessaloniki University, 1990; 「ディオニシウ・レクシヨナリーの受難週挿絵における典礼的性格」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊第 18 集 文学芸術編 1991 年, pp.103-112; 「ディオニシウ・レクシヨナリーの寄進者」『美術史研究』30(1992), pp.51-66; 「ビザンティン写本挿絵におけるヨハネ福音書冒頭部分の絵画化」『美學』172(1993), pp.12-22; "Picturization of John 1:1-18 in Byzantine Manuscript Illustration," *AESTHETICS* 6(1994), pp.59-72; 「天理図書館所蔵のビザンティン・レクシヨナリーについて」『ビブリア』103(1995 年 5 月), pp.198-175; 「ビザンティン・レクシヨナリー写本研究の諸問題」『ビブリア』105(1996 年 5 月), pp.206-232; 「ビザンティン皇帝アンドロニコス二世のレクシヨナリー」『鹿島美術研究（年報別冊）』13(1996), pp.132-40; 「イワン・ドゥイチェフ研究所（ブルガリア）のビザンティン・レクシヨナリー」『女子美術大学研究紀要』31(2001), pp.1-10; 「中期ビザンティン挿絵入りレクシヨナリーの聖者暦」『地中海研究所紀要』3(2005), pp.83-89.（海老原梨江と共著）; 「中期ビザンティン・レクシヨナリー写本の挿絵研究序説」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』50-3(2005), pp.51-61; "Liturgical Illustrations in the Byzantine Lectionary Cod.587 in the Dionysiou Monastery, Mount Athos," *Orient*, 41(2006), pp.91-108; 「アトス山イヴィロン修道院レクシヨナリーのパトロン」『キリスト教学』48(2006), pp.19-34.

- ・ワシントン、Dumbarton Oaks Cod.1 (11 世紀)
- ・ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館 Cod. M 639 (11 世紀)
- ・ヴァチカン図書館 Cod.Vat.gr.1156 (11 世紀)
- ・アテネ国立図書館 Cod.190 (11 世紀)
- ・ヴェネツィア、Istituto Ellenico, Cod.gr.2 (11 世紀)
- ・アトス山ディオニシウ修道院 Cod.587 (11 世紀)
- ・アテネ、ベナキ美術館 Cod.TA 318= Προθήκη 30.5 (11 世紀)
- ・ニューヨーク、メトロポリタン美術館、ジェファリス・レクショナリー (11 世紀)
- ・アテネ国立図書館 Cod.68 (11/12 世紀)
- ・パリ国立図書館 Cod.Suppl.gr.27 (11/12 世紀)
- ・アトス山パンテレimon修道院 Cod.2 (12 世紀)
- ・イスタンブール、総主教座 Cod.8 (12 世紀)
- ・ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館 Cod. M 692 (12 世紀)
- ・アトス山イヴィロン修道院 Cod.111m (13 世紀)

現存する写本を見る限り、レクショナリー挿絵に定型はない。全頁大、半頁大、コラム・ピクチャー、余白、イニシャル等さまざまな形式が用いられており、挿絵を付す箇所も写本によって一定しない<sup>3</sup>。この点では四福音書写本も同様である。今回ラウデン教授の来日講演によって、「ジェファリス・レクショナリー」が世界初公表された（来日中に、メトロポリタン美術館より、公表を許可するメールが来るという劇的なタイミングであった）。近い将来ラウデン教授による小モノグラフが発表されることになるこの写本には、福音書記者像と若干のイニシャル挿絵に加えて、「ヘロデとヘロデアを糾弾する洗礼者ヨハネ」の余白挿絵が描かれている。なぜこの情景のみが写本に描かれたのか、パトロンの意向と関連するのか、今後の研究が待たれる。

美術史の立場からは、レクショナリー写本挿絵の系統だった研究を心がけたいが、本シンポジウムでは少々異なる側面の重要性を強調したい。レクショナリー後半の聖者暦 Synaxarion / Menologion である。9 月 1 日～8 月 31 日の 1 年各日にどの聖人を祀るか。正教会の聖者暦は一定しており、ヴァリエーションはそれほどないと考えられていたためか、レクショナリーの聖者暦はこれまで研究者の関心を引いてこなかった。

ビザンティン写本の制作地は、コロフォン等の文字によって記されていない限り、挿絵・彩飾の様式、あるいは文字の書体によって推定されてきた。しかし若干の例外<sup>4</sup>を除いて、その判断は印象論となりやすい。挿絵やパレオグラフィが洗練されていれば「コンスタンティノポリス作」

<sup>3</sup> この分野で先駆的な論考を書かれたのは辻成史先生であり、発表後四半世紀以上を過ぎた今日でもその内容は古びていない。Sh.Tsujii, "Lectionary," in: G.Vikan (ed.), *Illuminated Greek Manuscripts from American Collections. An Exhibition in Honor of Kurt Weitzmann*, Princeton 1973, pp.34-39.

<sup>4</sup> キプロス制作の写本群を検討したカーの研究がある。A.Weyl Carr, *Byzantine Illumination 1150-1250. The Study of a Provincial Tradition*, Chicago 1987.

といった具合である。しかしレクショナリーに限っては、首都コンスタンティノポリス制作であると確定できる写本が少なくない。聖者暦において、首都の典礼に頻繁に言及していれば、それは首都の教会 / 修道院のために制作された写本であると確実に言える<sup>5</sup>。

目下筆者は科研の助成を得て、レクショナリー写本の聖者暦を蒐集中であるが、将来ある程度の数のデータを得て、聖者暦のパターンを抽出することができれば、リセンションを確立することが期待される。コロフォンによって制作された場所（修道院）が特定できる写本をそこに当てはめることによって、特定の修道院の聖者暦も復元できるかもしれない。ビザンティン世界においてはほとんど未解明の分野である、写本工房 *scriptorium* の問題にも光が当たるであろう。上述は遠大な計画ではあるが、もっと直截に写本のパトロンが確定できる場合がある。聖者暦中の「献堂祭」*encaenia* / ἐγκαίνια の記載である。献堂祭の記載には2通りあって、第一は複数の、ある関連をもった聖堂の献堂を記念するものである。例えば Cod.Paris. gr.286<sup>6</sup>には以下の *encaenia* の記載がある。

9/13 Anastasis Rotonda (tes agias Christou kai Theou hemon Anastaseos)

9/21 Theotokos en te Petra

10/31 Eukterion tes Theotokou tou en to Patriarcheio

11/4 Theotokos en tois Kyrou

11/5 Theodoros en tois Sphorakiou

12/1 Naos tou Palatiou

12/18 Theotokos ton Chalkoprateion

12/22 Anoixia tes Megales Ekklesias

12/23 Egkainia tes Megales Ekklesias

5/1 tes Neas Basilikes Ekklesias

8/31 Katathesia tes zones tes Theotokou en tois Chalkoprateiois kai egkainia

これらの多くが宮廷と近い関係をもつ聖堂であるのは興味深い。これとほぼ同様の *encaenia* を有する写本は、他にも少なくない。このデータによって、当該写本が宮廷周辺で制作され、用いられたことが想像されるが、直接のパトロンを確定するにはいたらない。

これに対して第二のパターンは、特定の聖堂の献堂のみを祝うものである。例えば 11 / 12 世紀の優れた彩飾とイニシャル挿絵をもつギリシア国立図書館（アテネ）写本 Cod.2363 には、12 月 16 日の項に「開基にして最も聖なるコンスタンティノポリス総主教ニコラオスの思い出に」

<sup>5</sup> ラウデン教授が「ジェファリス・レクショナリー」をコンスタンティノポリス写本と同定したのも、筆者の 2005 年研究所紀要論文のデータに基づいたこの手法による。

<sup>6</sup> この写本はコンスタンティノポリス総主教座で実際に使用された 11 世紀の写本である、と私は考えている。これについては別稿近刊予定。

との記載があり、8月14日には「この聖なる聖堂の献堂に」と記される<sup>7</sup>。従ってこの写本は、コンスタンティノポリス総主教ニコラオスによって、8月14日に献堂された聖堂／修道院のために制作されたことがわかる。写本の様式から、総主教ニコラオスは12世紀初頭以前の人でなければならない。該当するのは、ニコラオス1世ミスティコス（在位901-907、912-925）、ニコラオス2世クリソベルギス（在位984-996）、ニコラオス3世グラマティコス（在位1084-1111）の3人であるが、1世の逝去は5月15日とわかっているため、命日12月16日との条件に合致しない。3世はコンスタンティノポリスに洗礼者ヨハネに捧げられた修道院を建立していることがわかっている<sup>8</sup>が、1111年以降というのは、写本の年代としてやや遅すぎる感がある。さしあたって所与の条件から詰められるのは、以上までである。

バリ写本 Cod.Paris.Coislin gr.31 は、5月16日に Agia Dynamis 聖堂の献堂を祝う。これは聖人ではなくキリストの特性である「力」に捧げられた特殊な聖堂なので、コンスタンティノポリスのアギア・ディナミス聖堂<sup>9</sup>のための写本であることがわかる。ナラティヴなキリスト伝挿絵をもつアトス山イヴィロン修道院写本 Cod.1 は、10月23日に Agios Iakobos の献堂を記す。これは挿絵の図像学的検討によって、コンスタンティノポリス Chalkoprateia 聖母聖堂内の聖ヤコブ礼拝堂<sup>10</sup>に言及したものと知れる<sup>11</sup>。

レクショナリー写本の聖者暦の研究はようやく途に就いたところであり、方法上の可能性と若干の成果を述べることにとどまる。しかし、一定のデータを蒐集・分析した後には、他ジャンルの写本に及ぶる知見をもたらすものと信ずる。

---

<sup>7</sup> A.Marava-Chatzinicolaou, Ch.Toufexi-Paschou, *Catalogue of the Illuminated Byzantine Manuscripts of the National Library of Greece*, vol.1, Athens 1978, cat.no.35, pp.149ff., esp.p.153.

<sup>8</sup> R.Janin, *Les églises et les monastères*, Paris 1969, pp.418f..

<sup>9</sup> Ibid., p.101.

<sup>10</sup> Ibid., pp.253ff..

<sup>11</sup> 註1拙稿2006年論文参照。